

私もほぼ50年

新潟大学名誉教授 花田 晃 治

昭和43年（1968年）、ほぼ50年前、東京医科歯科大学大学院を修了し助手に採用されて一年「よし！これから教育、臨床、研究だ！」と気合を入れていた矢先、三浦不二夫教授に呼ばれ「君、ちょっと新潟に行ってくれないか」と突然言われ「ハイ」と答えて帰宅し、カミさんから「こんな大事なことを私に相談もせず決めてくるの？」と言われても言い訳もできない時代に、ひとり夜行列車「天の川」に乗り新潟にやってきました。

新潟大学医学部長ひき続き新潟大学長を務めた伊藤辰治氏は、東京医科歯科大学歯学部と大阪大学歯学部しかなかった時代に日本海側唯一の国立歯学部を創ると構想され、奮闘努力の結果、昭和40年に新潟大学歯学部が創設されました。こんな経過があったからでしょう。伊藤学長は、卒業式後の歯学部祝賀会へ真っ先に医学部より先に駆けつけて祝辞を述べてくださいました。それでも伊藤学長のお孫さんの矯正治療をすることになって「抜歯に口腔外科に行ってください」と言うや「君が抜け」と言われて抜きましたが、これには参りました。伊藤学長は江南区沢海にある北方文化博物館長伊藤文吉氏の系図の中にあります。伊藤文吉氏は新潟大学総合講義「食べる」の初期にご登場いただき学生から羨望と尊敬の眼差しを受けておられました。

官舎があると言われて来たのにそんなものではなく事務の方がやっと見つけてくれたアパートは沼垂の日活ポルノ映画館裏の小屋でした。新潟には賃貸アパートがほとんどない時代でした。3月末の転勤時期まで待ってやっと見つけてくれた鳥屋野のアパートの周りからは蚊が湧き上がっていました。やっと小金町の官舎に入れてもらえましたが、プレハブ2棟続きで隣の怒鳴り声と泣き声は筒抜けでしたし、トタン屋根は夏にはフライパン状態、冬は凍るように寒く雪が柱の隙間から降っ

てきました。病院事務の方とは毎日5時過ぎると宴会でした。「寒梅は二級しか飲まん。でも水だ」と灘の酒を飲んでおられました。寒梅が有名になったのは雑誌「酒」の佐々木久子さんのおかげです。三越デパートは、小林百貨店・小林劇場でした。榎谷小路の西堀通り、東堀通りの交差点の信号は夕方から黄色と赤の点滅で驚きました。追い越しも割り込みもない、おとなしいドライバーだと東京から来た神風ドライバーには映りました。車の運転は、雪道3年と言われ、飛び込んだり、回転したり、スタックしたりしながらやっばり3年かかりました。1歳過ぎの娘は東京での肉食からいきなり魚好きになり、自転車の荷台に乗せて売りに来るおばさんの魚は新鮮で米の美味しさに驚きました。山盛りの南蛮エビは安くて美味しく、枝豆とビールは最高の夏でした。が、卵と玉ねぎでとじてなくゴロツと三つのっているだけのカツ丼の出前に「頼んだのはカツ丼だ！」と叫んだり、すまし汁に麺とナルトのラーメン、すき焼きは豚肉だと牛肉の置いてない肉屋、フノリ入りのぬるぬるした蕎麦をワサビではなく和辛子で、刻みネギではなくアサツキをかじりながら食べることなどなど、この世のものではないと驚きました。

病院では歯科医が少なく新患当番もやり、お年寄りの新潟弁がわからないのに沼垂弁、北蒲コトバなど日本語とは思えず看護婦に通訳してもらいました。患者「先生様、口の中に草が来た」私「なんだって？」看護婦「腐って腫れたんだって」。当直をやらされ間借りしていた耳鼻科病室で患者さんの隣のベッドでガンの痛みとうなされる声に一睡も出来ない夜もありました。医局、外来は元医病病室、私の講師室は元病棟の浴室兼炊事場でした。天井裏に巣食っている鳩が騒ぐとダニが落ちてきました。

歯学部第1期生とは5年生春からお付き合いが始まりました。全員がハツラツとして若さに溢れ、我々が歯学部を創るという気概が感じられ、若かった私も気合が入りました。プレハブの研究室は壁も屋根も夏の太陽に焼けて素晴らしく暑く、夏休み前の基礎実習も一段落し、大勢の学生、看護婦を加えて総勢50数人が参加して矯正学教室の第1回ビーチサイドコンパ（と私が命名しましたが後に浜コン）が金衛町浜茶屋前の砂浜（当時はかなり広がった）で始まりました。学生が裁判所裏の松本酒店（今はない）から重い木製の本物のビール樽を担いでくれました。主流は日本酒。その後、医学部医局が隣で始めたりして、新潟の綺麗な夕日を浴びて砂浜でビールを飲むことが新潟市民に浸透していきましたが、今は許されなくて寂しい。夜が更けて学生と私だけが残り煌々と燃える焚き火の周りで「ソラニャ モグラガ ホーホケキョ、、」と六花寮生を中心に歌い踊り狂いました。翌朝、浜茶屋のおじさんが歯学部事務に怒鳴り込んできて燃やしてしまった電柱のお金を払うことになり、高い代償を払い元祖「ビーチサイドコンパ」の名誉だけが残りました。

11月のある日の授業中、ウォーという歓声と拍手が起こり、学生の視線の先の窓の外に初雪が舞い降りていました。雪を待つ人たちがいることを初めて知りました。12月、一人ポツンと技工をしていると、学生が私のカレンダーに自分の名前を書き込みにやってきます。学生がスキーを教えてくれるという。後でわかったことですが、それまではスキー板を担いで電車に乗って浦佐・湯沢スキー場に行っていたのが、そこに現れた私のカローラが狙いだったのです。土曜日には4名の学生の名前、日曜日には他の4名の学生の名前が記入されています。土曜日の朝6時にカローラを運転して県庁（現市役所）前に行くと、待っていた学生が乗り込みます。高速道路のない雪道は片道3～4時間かかりました。ナイターまで滑って帰ってくるのは真夜中。翌日曜日6時に県庁前で他の学生が乗り込みます。月曜日に痛い頭と体を堪えて診療、技工をしていると土曜日がやってきます。こうしてカレンダーは3月末まで学生の名前で埋まっていました。学生にはよく遊んでもらいましたが、スキーを教えてもらった記憶はあり

ません。スキー場に着くや「じゃ、先生、気をつけて」と滑って行ってしまいますので、やむなくスキー学校に入り「ナツハコメツグッテンダ」という先生から教わっていました。スキーは月山の山スキーまで続き、唯一の、電気もない姥沢小屋に泊まり、パラフィンワックスを丸めてロウソクを作り屋根裏部屋で腹ばいになって麻雀をしました。姥ヶ岳頂上まで酒、食材の荷物を担ぎ上げてバーベキュー宴会をしていると、当時考えもつかない他のスキーヤーから呆れ顔で見られていました。11月になると、東京のような青空はなく、どんよりとして洗濯物が干せないと嘆くカミさんの傍らで、これで雪のシーズンが来ると思えるようになったのはスキーのおかげと感謝しています。

矯正科ポリクリでは、一人2週間、各々に新患一人を渡し症例分析・診断・装置製作までやってもらった上、英文のCase reportをそれぞれに渡し抄録にまとめてもらいました。若気の至りで随分無茶をしましたが学生はいつもついてくれました。今思えば、自ら学ぶシステム元祖だったかもしれません。

東京で教授から「ちょっと行ってくれ」と言われて、一年か長くて二年だろうと思っていたのは私だけで、元気のいい学生と遊んでいるうちに時は流れ、母校に教授として戻れという命令にも「私には新潟で会えた素晴らしい学生が、卒業生が、医局員がいる」「ITが進んできた今、東京でなく新潟でも仕事は十分できる」「娘たちから『私たちが帰るのは新潟だ』と言われ、『新潟にいる』と決め、今があることに感謝しています。同級生の広瀬達男君と「下顎前突の外科的矯正」という、日本初、「顎変形症の外科的矯正治療」の本を出版することができたのも新潟での貴重な財産と、今は思えます。

歯学部からの委員として参加した「旭町再開発計画」において提案した116号線拡張工事に伴う「歯学部桜の大移動」「歯学部附属病院駐車場縮小に対する立体駐車場の整備」「医歯学総合病院の創設」「歯学部脇の医歯学総合病院道路の拡張とバス乗り入れ」などが完成して斬新な病院の威容とそれに向かい合う大型改修後の歯学部を見ることができたことを大いに喜びとしています。